

1

一心同体のふたりは双子と呼ばれている。しかし本当は兄弟でもなければ似た者同士でもない。彼らほどかけ離れたふたりを見つけるのは難しいといってもいいほどだ。ふたりに共通しているのはその目つきだ。澄んだ静かな瞳は、猜疑心を宿したまなざしのなかでうつろに固定されている。ドルダは重々しい体つきの物静かな男で、赤ら顔にはたやすく笑顔が浮かんだ。ブリニョーネは痩せ型の敏捷な男で、髪が黒い。ひとく青ざめた肌の色は、実際よりも長く獄中生活を送った人間にみえる。

ふたりはブルネス駅で地下鉄を下り、写真屋のショーウィンドーの前で立ち止まると、誰にもつけられていないことを確かめる。どちらも人目を引く風変わりな格好をしていた。ふたり組のボクサーか葬儀屋の従業員といった風情だ。黒っぽいダブルのスーツを優雅に着こなし、髪を短く刈りこみ、手入れの行き届いた手をしている。透き通った白い陽光が降りそそぐ春ののどかな昼下がりに、オフィスをあとにした人々は、物思いにふけるような表情を浮かべて家路につく。

ふたりは信号が青に変わるのを待ってからサンタフェ通りを渡り、アレナレス通りへ向かう。ここへ来る途中、コンスティトゥション駅で地下鉄に乗り、誰にもつけられないことを確かめながら何度か乗り換えた。迷信深いドルダは、いつも悪い兆候を見つけてはあれこれ臆測をめぐらせ、そのせいでやっかいな人生を歩むことになった。彼が好むのは、地下鉄に乗って駅のホームやトンネルの黄色い照明の下を移動することであり、がらんとした車両に乗りこんで目的地まで運ばれていくことだった。危険に身をさらしているときは（それはいつものことだったが）、都会の地中深くを移動していれば身の安全を確信することができた。警察の尾行を逃れるのは簡単なことだった。誰もいないホームに最後まで残り、電車が遠ざかっていくのを見送れば、自分が無事であることを確かめることができる。

ブリニョーネはドルダをなだめようとする。

「すべてうまくいくさ。なにもかも計画どおりだ」

「いろんなやつがかかわっているのが気に食わねえんだ」

「何かが起きるとすれば、いろんなやつがかかわっていようがいまいが同じことだ。とえらい目に遭っちまったが最後、そのときはもうどうすることもできない。ちょっと寄り道をして煙草を買っている隙に万事休す、なんてことになりかねないからな」

「いったい何だあって俺たちを呼び集めたりするんだらうな？」

襲撃を実行するには、まず計画を立て、漏洩を防ぐためにすばやく行動しなければならぬ。すばやく、というのは、第一報がもたらされてから国外の潜伏先が割れるまでの二日か三日のあいだに、ということだ。どんな場合であれ金を払うのを忘れてはいけない。しかし同時に、誰かが別のグループの連

中に情報を売り渡す危険を覚悟しなければならない。

〈双子〉は、持ち場となっていたアレナレス通りのアパートを訪れる。安全な地区にあるこぎれいな建物で、ビル工場に面した小路を背にしている。作戦本部として借りられたものだ。

「高級住宅街のアパートだが、ひと仕事してチャンス到来を待つための隠れ家ってわけだ」ふたりを雇ったマリートはそう言った。〈双子〉は悪党集団の精鋭だった。マリートは彼らを信用してあらゆる情報を提供した。とはいえ、つねに用心を怠らないマリートは、身の安全の確保や作戦の統括については病的なまでに神経質で、人前に姿を現すことはけっしてなかった。透明人間でありながら有能なリーダーとしてグループを統率するマリートは、どこか遠くに身を置きながら、思いもよらない人脈やコネを利用して。気がいドルダに言わせれば、彼こそ〈気がいマール〉だった。自分ではただマリート〔悪意〕と称していたので、これが彼の通り名だったのだろう。彼はかつてデポット地区でベルドゥーゴ〔死刑執行人の意〕という名の警官に会ったことがあるが、こっちのほうがよくぼとひといい。ベルドゥーゴにエスクラーボ〔奴隸の意〕、なかにはデラトール〔密告者の意〕というのもいたが、それに比べれば〈マリート〉のほうがよっぽとました。ほかのメンバーにもそれぞれあだ名がついていた（〈坊やネ〉ことブリニョーネ、〈金髪ガウチョネ〉ことドルダ）が、マリートというのは自分で選んだ偽名である。ネズミのような顔、鼻にひつついたような小さな目、ほとんどないに等しい下顎、赤みを帯びた髪、冷静沈着、女のような手、頭脳明晰、エンジンや銃器に精通し、二分もあれば時限爆弾を組み立てることができる。細い指をこんなふうに動かして、時限装置を調整し、火薬を詰める。まるで盲人のように、何も見ないでピアノのごとく両手を器用に動かす。警察署だって吹っ飛ばすことができる。

リーダーのマリートは、計画を練り、政治家や警察に渡りをつけ、上がりの半分を提供するという約束のもと、彼らから詳しい情報や見取り図を入手した。この取引には大勢の人間がかかわっていたが、マリートの腹つもりでは、彼らに分け前を渡してさっさとずらかり、ウルグアイへ逃げのびるだけの時間がゆうに十時間か十二時間はあるはずだった。

その日の午後、メンバーはふたつのグループに分けられた。〈双子〉はアレナレス通りのアパートに顔を出し、作戦の細部をおさらいした。一方、マリートは、襲撃を予定している現場の正面に位置するホテルに部屋を借りた。そして、部屋の窓からサンフェルナンド広場とプロビンシア銀行の建物を眺め、襲撃の際の行動経路や時間配分、車列の流れ、通りを逆走しての逃走劇などを頭に思い描いた。

会計課のIKAランドクルーザーは、左手に発進して時計回りに進むはずだ。したがって、ランドクルーザーが役場の門を通過するまえに、正面から接近してその進路を絶たなければいけない。車列の流れに沿って広場を大きく一周しなければならぬから、その途中でランドクルーザーを停止させるのだ。そして、反撃の隙を与えずに運転手もろとも警備員を皆殺しにする。不意打ちだけが頼りなのだ。

目撃者のなかには、マリートがホテルで女を同伴していたという者もいれば、ホテルにいたのはふたり組の男で、女はいなかったと主張する者もいる。ふたり組の男のうちのひとりには、神経質そうな痩せた男で、ひっきりなしに注射を打っていた〈がに股〉バサンド。彼はその日の午後、マリートといっしょにサンフェルナンドのホテルの一角に閉じこもり、通りに面した窓から銀行の様子をうかがっていた。襲撃事件のあと警察がホテルの部屋に踏みこんでみると、浴室から数本の注射器とスプーン、放置されたガラス片が発見された。警察は、一階のバルに下りてアルコールランプを所望した若者が〈がに股〉

にちがいがないとにらんだ。こういう場合の常として、目撃者たちの証言は互いに食い違っていたが、その若者が俳優のような風貌の持ち主で、焦点の定まらない目をしていたという点では全員の証言が一致していた。したがって、彼こそが襲撃の前にヘロインを注射し、麻薬を加熱するためのアルコールランブを借りた男にちがいがないことが推察された。目撃者たちはまもなく彼のことを「ヘル・ピベ」〔若者、少年の意〕と呼ぶようになり、やがてバサンとブリニョーネが混同され、ふたりを同一人物とみなしてそれが「ヘル・ピベ」だと断言する者が現れた。ひどく興奮した瘦せた男は、左手にピストルをもち、治安警備隊員のように銃口を空に向けていたという。あのような状況に置かれた人間なら誰しも、明々白々であると同時に混乱を極めた出来事を目の当たりにしたら、体内をアドレナリンがかけめぐり、気が動転し、冷静な判断力を失ってしまうものだ。I K Aランドクルーザーの行く手を阻むように一台の車が停止するのを目撃した者もいた。大きな音が鳴り響いたかと思うと、地面に倒れた男が足をばたつかせながら死んでいったという。

おそらく犯人たちは、襲撃のあとで首尾よく逃走することができなかった場合は、ホテルに籠城するつもりだったのだろう。すべての証言を突き合わせると、ふたりの男がホテルから銀行の様子をうかがい、ほかの三人が「特別仕様」のシボレー400に乗ってやってきたことは明らかだった。弾丸のように疾駆する車だ。グループのなかに自動車整備工がいて、五千回転を越える強力なエンジンを組みこみ、猛スピードで走れるように改造したのだろう。

サンフェルナンド地区は、ブエノスアイレスの郊外に位置する住宅街である。静かな通りには街路樹が立ち並び、二十世紀初頭に建てられた広大な邸宅がいたるところに建っている。それらは学校の校舎

に改築されたり、川に面した高い崖の上に打ち捨てられたりしている。

広場は、春の白い日射しと静寂に包まれている。

襲撃の前日、マリートとへがに股バサンのふたりが昼過ぎから夜にかけてサンフェルナンド広場に面したホテルの一室に閉じこもっているあいだ、ほかのメンバーたちはアレナレス通りのアパートに身を潜めていた。彼らはブエノスアイレス州で盗んだ車を地下のガレージに隠していた。銃をはじめ必要な装備を携えて裏階段を上った彼らは、アパートの一室に閉じこもり、ブラインドを下ろしたまま、つぎの指令が来るのを待った。

犯行の前日ほど手に負えないものはない。準備は万端、あとは表に飛び出して行動を起こすばかりである。そんなときは、まるで予言者にもなったかのように、未来の出来事が脳裏に浮かび、どんな些細なことでも悪い兆候にみえてしまうものだ。怪しげな動きに目を光らせているタレこみ屋が警察に通報すれば、待ち伏せに遭って一巻の終わりとなってしまふ。だからドルダに言わせれば、「危険な匂い」を嗅ぎつけたらすべてを一からやり直し、しかるべき時が来るまでおとなしく待つべきなのだ。

現金の受け渡しが行なわれるのは毎月二十八日の午後三時と決まっていた。プロビンシア銀行から持ち出された現金は役場の建物まで運ばれる。およそ六十万ドルの現金を積みこんだIKAランドクルーザーが広場の外縁に沿って左から右に走り抜ける。銀行の入口でランドクルーザーに現金が積みこまれてから、役場の裏門を通ってなかへ運びこまれるまでの所要時間は七分だ。

「なあ兄弟」へ坊や、ことブリーニョネは笑みを浮かべながらドルダに話しかける。「ここまで厳密に練られた作戦にかかわったことは、いまままで一度もなかったはずだ。すべては計画とおりに進むはずだ」